

当院は脳卒中の専門施設として医療を提供するだけにとどまらず、医学の進歩に寄与する新しい治療法の開発も行っています。

今回その一環として、渡邊耕介医師らによる脳卒中急性期の磁気刺激治療に関する研究が専門誌に掲載されました（*J Neurol Sci* 2018;384:10-14）。渡邊医師らの研究は、脳卒中急性期に磁気刺激治療を併用すると、麻痺の回復を促進し、後遺症を減らせることを示したものです。磁気刺激の方法にはいくつか種類がありますが、刺激方法によって効果も違って来るようです。入院してくるすべての脳卒中患者にこの治療ができるわけではありませんが、急性期脳卒中治療の新たな可能性を示すものになりそうです。

また、中溝知樹医師らは、心房細動患者の脳卒中発症リスクに対する全く新しい概念を専門誌に発表しました（*PLoS One* 2018;13:e0194307）。心房細動があると脳卒中のリスクが高まりますが、中溝医師らは、心房細動があってもずっと脳卒中にならずにいると、脳卒中のリスクが徐々に減ってくることを理論的に証明しました。難しいので癌の再発に例えると、例えば癌治療をしたばかりの人と、治療から5年経過した人では、癌の再発リスクは違ってきます。癌で治療後に5年経過すれば、それだけ再発の心配が減ってくるのはご存知ですよね。これと同様なことが、心房細動による脳卒中にも当てはまるようです。こうした概念は、脳卒中を含めた心血管系の疾患では全く認識されておらず、画期的な概念といえます。この概念に基づいた中溝医師らの計算により、心房細動を持っている人の脳卒中予防薬の選択が、より適切に行えるようになるでしょう。